教祖様

ふしぎな婦（おんな）の一生

芹澤光治良

教祖様

昭和五十三年十月二十六日　初版

著者　芹澤光治良
発行者　山本三四男
印刷所　花山印刷

東京都千代田区神田神保町一―六〇
発行所　株式会社　善本社
〒101　電話　東京　二九四―五三一七
振替　東京　九―一一九五五七

落丁、乱丁本はおとりかえいたします

再版のいきさつ

——中山正善・真柱の友情に応えて——

「教祖様」は昭和三十四年の暮れに角川書店から出版されたが、発売一年半後に絶版にした。

この作品は敗戦後二、三年して、なお社会の混乱しているころ、天理時報社の強引な依頼によって、二十四年から三十二年にかけて「天理時報」に連載したものである。尤も、書き出しには、資料難と資料探しの苦心をのべて、資料に関して読者の協力を求める切ない文章を、何回もつづけて、時報社をあわてさせたようである。

執筆することを約束してから、信じられないことだが、資料について、時報社も天理教本部も何等の協力をしなかった。天理教の真柱中山氏に頼む以外にないと判明したが、誰も引きあわせてくれる者がないために、やむなく紹介者もなく敢然と訪ねて懇願したところ、資料はないからと冷たく拒まれた。それならば、「教祖様」を書きようもなく、書く意欲も失なって、時報社長に辞退しようとしたが、その時の悲しい憤りは、すぐには胸におさまらなく、これは一体どういうわけか、両親が全財産と生涯をささげて、そのために、私は幼い時から孤児のように、地を這うようにして

成長したが、その天理教というのは、こんなものだったか、この機会にきわめなければ、識ることはできないからと、思いなおして、よし、資料の援助がなくても、書いてみせるぞと、私は憤りから気おいたち、手探りのようにして資料を探した。そして、天理時報の「教祖様」の序章としてその資料探りの歎きを書きつづけて、その間、何カ月かかかって仄かに教祖像が見えて来たので、神がかりのあった天保九年十月二十六日から、初めて第一章として書いた。昭和三十四年に一本にまとめて角川書店から出版する時に、序章をすてて、その代りに、神がかりのあるまでの教祖の生活を書き加えて第一章とし、第一章以下をずらさせて、現在の「教祖様」にしたのだった。

天理時報に掲載した原稿は天理図書館に保存されていると聞くが、戦後は原稿は出版された後に、その所有権が著者にあるものとされているのだから、せめて序章の部分だけでも「芹沢文学館」に寄贈してもらえれば、私も再読できるのだが、三十年近く、あの序章は残念ながら読んでいない。

私が神がかりから書き出したことは、時の真柱氏の興味をひいたらしく、また私の執筆態度をよしとして、二年後二十六年の初夏にわざわざ戦災後仮寓していた陋屋に訪ねて来られて友情をもとめた。しかし、それでも、「教祖様」の資料の援助はなかったが、その後二年ばかりして、真柱自身が天理教の復元の一つとして、「稿本天理教祖伝」を編集していることを偶然知って、再び資料の援助を頼んで、多少資料らしいものを得たものの、私の心にすでに成っていたこの作品の構成を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

変えなければならないようなものはなかった。ただ、その頃から真柱氏は教祖について語ることをたのしみにして、上京する時など、よく教会や料亭に私を呼び出したが、私も教祖や信仰について、遠慮のない意見を述べ、議論したものだった。しかし、三十二年にこの作品を書き終ると、私は信仰問題に興味を失なってその楽しい議論を自ら避けた。それで真柱氏との関係も終ったものと思ったが——

実は真柱氏との友情はその以後厚くなったようだ。一宗教の中心の柱となり信者にかこまれて、神の代理をすることが、個人にとってどんなに大変で難事であるか、氏の孤独な魂もわかったし、また、偉大な能力を持ちながら、周囲からは教団の専制君主のように敬されているだけで、理解されない純粋で、気の毒な人柄にも惹かれたからだった。

この書物が単行本になって一年半ばかり後、真柱氏は何かの話の序でに、天理教の「稿本天理教祖伝」を、各教会に朝夕読むようにすすめているが、教会によっては、「稿本天理教祖伝」の代りに、この「教祖様」を読むところがあるとて、困却しているようであったから、私は友情のしるしとして、出版社に話してこの書物を絶版にした。それから後、真柱氏は私を天理教の信徒にしようとして、親心あふれる申出をしたが、私はそれを受けなかった。同じ申出を、一年おきぐらいに二回、ちがった形で親切に、また熱心にしたが、私は当惑しながらおことわりした。私は実父が生涯を捧げた天理教を信じないのではないが、釈尊の教えも、キリストの教えも同様に信ずるばかりで

なく、一宗派に帰依することよりも、自由人として真理をもとめて、それがかりに滅びの道でもあっても、それを選びたかった。そんな私を憐んで、私が病弱であり、十歳以上も年上であるからとて、私の死後、葬儀も家族の世話も引受けるからと、慰め、励ました。そんな友情であった。

四十二年の五月はじめの或る晴れた朝、思いがけなく真柱氏から電話で、「今日お別れに行くから、君の食べる昼食をご馳走してくれ」ということだった。お別れの意味が判らなかったが、青年に支えられ、門から階段をよろめきながら上って来た弱々しい姿を見た瞬間、これは大変だと、胸まで凍る思いがした。サロンに案内して休んでもらったところ、氏が重い糖尿病で、すでに視力も衰え、厳しい食餌療法を受けているけれど、普通食をとりながら、ゆっくり最後の別れをおしみたいということであった。

真柱氏は天理教本部に「憩いの家」と呼ぶ設備の完備した病院を経営し、多くの名医を擁して各専門で治療にあたらせているので、その管理のもとで、若い頃から柔道できたえた肉体が、これほど衰弱したとは、容易ならぬことだと、私は狼狽した。しかし、医者はどう言おうとも、氏は教祖を通じて親神の説いた教えの生きた代表者であり、しかも働き盛りであるのに、死ぬようなことがあってたまるものかと、私は胸をあつくして思いなおした。食餌療法など無視して、お好きな物を供しようと、近くで教会長をしている実妹に電話して調理方を頼み、フランスの旧友から贈られた古葡萄酒を抜いて、喜んでもらい、かつ、病気を克服してもらうために、その病気によって神が何

を氏に求めているか、こころに問い、神の啓示に従うようにと、私は真剣に語った。その私の天理教的発想法による忠告に、最初驚いたようであったが、すなおに聴いてくれた。そんなわけで、その日、友としてただ二人、数時間ゆっくり語りあって別れた。

実はその日、私は初めてこの人をわが親友のなかに加えて、それから毎日この親友の健康のために祈ったものだ。ところが、元気だと電話をくれて安心していると、その年の十一月十四日急死したと、知らされた。その死を私は、信じられなかった。生きていてもらいたかったのだ。今死んではならないと思ったのだった。葬儀にも行かなかった。求められても追悼文も書かなかった。親友として生きていると思っていたかった。

それから二年たって、四十四年の秋、やはり亡くなったのだと、悲しいけれど納得して、天理市におもむいて墓参をし、天理教の祖霊殿(それいでん)にも詣って、これで完全に天理教とも縁がきれたものと思って、私は天理市を去った。

その年から、私の中学校の後輩で畏友の岡野君が、故郷の海辺に私の名を冠した文学館を建てようと建築にかかった。実はその前年まで十年ばかりかかって、「人間の運命」（十四巻）をようやく書きおろして、私は疲労し切っていた。「人間の運命」はもっとつづく構想であったが、疲労と喘息の苦しみで、書き終らないで死にそうな懸念が出て、あわてて十四巻で筆をとめたのだった。その年の終りに「人間の運命」に芸術院賞が授けられて、ペンクラブが、高橋健二氏と私の芸術院

賞受賞を祝ってくれた時、私は多くの知人に、それとなく別れる機会だと秘かに考えて出席したほど、全身の衰えを感じていた。

翌年の春、「芹沢文学館」が完成して、開館式が行われることになった。その前に、文学館に納める書物や原稿や写真等を選び、書斎や書庫を整理するのに繁忙をきわめたが、いつも春さきに苦しむ喘息の小発作もあって、ほんとうに疲れ切ってしまった。その四月十九日の暁のことだったが、私は——喜ばなければいけないという声で呼びさまされた。ベッドの枕もとにおいてある椅子に、赤の和服を着た優しい老女がかけていた。数年かかって書いた、赤衣をお召しの教祖様ではなかろうかと、気がついたが……

——文学館を岡野さんが建てて下さると思うから、生きているうちに、こんなものができるのは……と、当惑したり、喜べないのかも知れないが……、神様のご褒美だと思って、喜ばなければいけない……

——私は残念ながら、神様から褒美を受けるようなことを何もしておりませんが……

——しているかどうか、それは神様がきめることですよ。貴方はただ喜んで褒美を受けさえすればいいのです……

——神様が褒美を下さるのならば、私は希望がありますが……

——申してごらん。

――喘息を根治してもらいたいのです。

――喘息は神様のお慈悲でしたが……、偉い先生方は、教祖伝を書けという神のせきこみだとか、祖先が胎児を中絶した因縁だとか、いろいろ理を話して苦しめたようですが、神様のお慈悲でしたよ……

――お慈悲だった……、わかるように話して下さい。

――喘息でもなかったら、神様の方を振り向くことなく、何処へ突走るかわからなかったからね……、あの結核もお慈悲でしたよ。でも、神様は仰しゃっているで。もう喘息で神様の方を振り向かせなくてもよいって。ですから、すっかりなおるで……、長い間苦労をかけたが、よくたんのうをして、神のこころに従って生きなさった。これからは好きなように自由に生きてよろしいと、神様は仰しゃっているで……、まだ頼みがあるのだろうか。

――ではお願いします（と言って、私は三つ年下の弟で、父の信仰をついで岳東大教会で役員をしているのが、この十数年固形物が喉に通らず、一日に卵の黄味一ケと牛乳一本で生きている上に、この一カ月ばかりは、光があたると目が痛んで開いていられないとて、昼でも雨戸をしめて苦しんでいるが、医者にかかるぐらいなら信心はしなかったと頑固に言って、家人を心配させているからと、話しかけると、弟さんに、心に喜べないことがあるとおやさんが言って心配していると伝えて下さい、それで弟さんの心が助かるから……と言って、なお促すので、私は永く留学して帰国した

二人の娘のことと、家庭的に苦しんでいる問題とを述べたが）

――お嬢ちゃんの将来は、神様が二人とも希望通りになるようきちんときめているから、心配いらん（と言って具体的に一つ一つ話してから）……、最後の問題も今年中に解決します、神様はちゃんと証拠を見せると、仰しゃるで……、文学館のこと、なあ、建てて下さるお友達は、真のまことで建てて下さるのや。それを、神様も喜んでいなさるもの、どんなことがあろうとも、喜ばなければいけません……

――わかりました。

そう答えたとたん、はっとしたが、その瞬間、赤衣の女人は消えていた。私は赤衣の女人に声をかけられて目がさめたこと、赤衣の女人は枕もとの椅子にかけていたこと、私はベッドから起き上る余裕がなく仰向けに寝たままだったが、ちゃん目がさめていたこと、短かったが確かに対話したこと等、一つ一つ確認してから、枕卓の上の時計を見た。四時五分前だった。起床するまでの三時間、ゆっくり考えたものだ。赤衣の女人が晩年赤衣を召していた天理教の教祖であったろうかと。その上、お話の内容についても納得のゆくまで整理して、それが一つずつこれから実証されるか、好奇心を持った。朝の食卓で家族に簡単に赤衣の女人の話をしたが、皆半信半疑だったけれど、近所で天理教会長をしている実妹に電話で伝えて、将来のあかしにした。

その翌日、「暮しの手帖」の記者が原稿を頼みに来た。私は喘息と疲労のために原稿をことわっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。記者は「暮しの手帖」の前号に喘息について書いているK博士の診療を受けるようにすすめた。私はすすめられる名医や妙薬にはすべてたより、最後に漢方医にまで信頼してかかったが、根治できなかったことを打明けて、K博士の話を聞き流した。しかし、記者は翌日K博士に診察(ランデヴー)の約束時間をもらって、私を迎えに来た。その親切を無下にことわれず、記者に案内されてアレルギー研究所へ行った。K博士は極めて簡単に検査して、七十四歳の私を、五十歳代の心臓だと励まして、私の喘息が絹アレルギーによるのだとて、注射をし、少量の薬をくれた。こんなことで二十三年間の宿痾がなおろうとは思わなかったが、それ以来今日まで喘息の発作は一度も起きない。

それから数日後、私は沼津の「芹沢文学館」の開館式について最後の打合わせに行った時、途中沼津の岳東大教会の弟の処へ立ち寄った。大教会は普請中で弟の家も取りこわすとか言って忙しく混雑の最中だったが、弟は座敷に床をのべて坐り、天気がいいのに雨戸をたてて暗くして、色目がねをかけていたが、私が来たからとて背後の雨戸を一尺ばかり開けさせた。骨と皮ばりに痩せて、私は竦然として見舞を述べたが、岳東大教会の普請が完成するまでは死ねないと言った。私はあわてて教祖にお会いしたことを簡単に話して、その時の教祖の言伝を、言葉通り伝えて、説明もしないですぐお暇して、待たした車で文学館へ行った。十五分ぐらいの面会だったが、これが最後だろうと覚悟した。三週間ばかりたって、文学館の開館式の日に、来賓のなかにその弟を発見した時、私は驚きに心臓が一尺もとびあがった気がした。

「あの三日目から、何でもおいしく食べられるようになってね。みんなむくんだと心配してくれるが、ふとって、元気になりました。目もよくなって、毎朝新聞も読んでます。今日は余り天気なんで、目がねをして来たが――」

それだけ聞いて、私は安心したが、その弟は今日なお元気であちこち教会へ巡教しているようだ。文学館の開館式の数日前に、上の娘が思いがけなく、希望していた大学の助教授に任命されたし、下の娘は五月に催したピアノの独奏会に、神が選んであると言った伴侶が楽屋へ訪れて、その冬には結婚した。最後の難問も暮れの三十一日の夜半に悲しい解決をみたが、家族がみなその悲歎を神の恵みとして受けとめたことに、私はただ驚き安堵したものだった。これで赤衣の女人の言葉はすべて実証されたのだ。このことについて、あの友、中山正善氏が生きていたらば話せるのにと、その死がこの時ほどくやまれたことはない。

それから三年半後、昭和四十八年の晩秋の冷える暁に、再びベッドの枕もとに赤衣の女人の訪れを受けた。

その三年半の間、私はすこぶる健康で、長篇小説「われに背くとも」と「遠ざかった明日」の二篇を創作したばかりでなく、四十七年の十一月にペンクラブが京都で開催した「日本文化研究者国際会議」のために、会長として、資金集めや会議の準備に忙殺され、その上、開催一カ月前には、出席者に関する相談のために、韓国、ソ連、フランスへ、あわただしく独り出向いたりしたが、会

議も成功裏に終って、ほっと息をついたが、肉体的にも精神的にも、最も健全であった。それ故私の神経で赤衣の女人を見たように錯覚したのではなかった。しかも、今度はその瞬間に、天理教の教祖であると判った。というのは、次のような声で目をさましたからだ。

——京都のAさんのことを頼みに参りましたよ。信仰の上では、まだ高校の入学試験に及第したばかりのようなものですから、目をかけてやって下さい……

私の処へは天理教の信者が時折訪ねて来る。A君もその一人であった。京都大学の文学部を優秀な成績で卒業し、信仰に疑惑を持たずに亡父のあとをついて分教会長をしているたのもしい求道者であるが、その数カ月元気をなくし、信徒にも真向に顔を向けられないと、歎いて絶望していた。その原因はA君のプライバシーに関することなので、文章にはできないが、私がA君であっても、同様に絶望して、私は純真なA君とちがって信仰をすてるだろうと考えられて、A君を励ますこともできなくて、ただ祈りながら、親神に問いただしたいくらいだった。どんな因縁があって、この真剣な求道者の魂を殺すのかと。

それ故、晩秋の小寒い暁に、そう言葉をかけてベッドの枕もとの椅子にかけられた赤衣の女人が晩年の親様だと、すぐ気がついた。

——Aさんに、おやさんが心配していると、話して下され、お子さんには決して起きないから、安心するようにとね……、これから話すことを、よく伝えて下され、頼みます。

と言って、ゆっくり話し出したが、A君の母堂に伝えなければならない言葉で、その内容は、ただ怖れ畏んで魂にきざむように聴かないことには、真向にとても母堂に話せないようなことで、私は全身を耳にして、お話をこころにたたみこんだ。

——わかりました。あさって京都へ参りますので、お伝えいたします。しかし、A君のような熱心な教会長でも、信仰上は高校の入試に及第したばかりでしょうか。

——偉い会長で落第したものもあるで……、入学したから助けようもあるが、落第しては助けようがなくて……、可哀想やなあ。親教会で支えてやればいいが、上の先生方も手を差しのべてやらんから、ただおちるばかりで、可哀想や、心が痛むけれどなあ……。

親様の頬には涙がこぼれおちて、そのお歎きに、私は胸のなかまで凍るようにふるえて、

——それはどなたでしょうか。

と、問いかけると、ふと立ち上り、背を向けて、そのまま消えてしまった。

私はすっかり目がさめて寒々とした。四時半だった。親様の言葉を、何度も反芻してみた。A君の母堂に伝える言葉は、すべて母堂のプライバシーに関することで、私は何も知らないので、私の意識にあったものが言葉になったのではなかった。それどころか、私は美しくて優しい母堂に一度お会いしたことがあるが、その言葉を伝えたらば、二度とお目にかかれそうもないような苛酷な内容であった。私は親神が天理教団が独占している神様ではなくて、この宇宙を創り、一分の狂いも

ない法則で働いている生きた力（神）だと、つくづく想うとともに、その話にふくまれた正と善と愛のみちた真実に、自然に頭が下った。

私はまず頼まれた役目を果すことにした。その翌日の夕、京都の都ホテルで開かれるペンクラブの例会に出席することにしてあったので、起きぬけにA君に電話して、親様の伝言があるから翌日の午後二時頃都ホテルに来て欲しいと話した。翌日、私は一時前に都ホテルに着いたが、A君は二時に自家用車で訪ねて来た。部屋に通ってもらうなり、赤衣の女人の話をして、母堂への言葉に移ろうとすると、A君は感激の余り蒼白になって——先生、これから教会で、母と家内といっしょに聞かせてくれませんかと、涙をためていた。

やむなくA君の車で教会へ行った。二階の客間に通されたが、私は茶菓の供応をもことわって、母堂と奥さんにも集まってもらって、親様のお言葉を話した。話したというより、物優しい母堂に話しにくい内容を、正確に伝えようと、こころに刻みこんだ言葉を、ただ一言ごとに引張り出したのにすぎなかった。

話し終って、顔を伏せて沈黙している三人に気がつくと、私は胸がつまって、この場にいられないような思いで——おやさまのお話はこれだけでしたが、お伝えしましたら、私はすべて忘れてしまいます。万一誤り伝えた点があれば、私が咎を受けましょう。では、帰らしてもらいますと、礼をして立ち上り、急いで静かに階下に降りて玄関へ出た。A君夫妻は顔中涙にして無言でついて来

た。私は通りでタクシーを拾うつもりであったが、A君が涙をこぼしながら車を運転して送ってくれた。私は地に伏して若いA君や立派な母堂に詫びなければならんようなことを言葉にしたために、黙りこくって帰った。

翌日午前のひかり号で帰京したが、京都駅にA君夫妻はわざわざ見送りに来たが、その時は二人とも晴やかな表情で、自分のような者にも親様がそれほど目をかけて下さるとは、勿体なくて……とか、神様が見抜き見通しだということを今更知って……とか、感動して話したようだが、私はなにか恥ずかしくて、早く列車が発車するようにと、そればかり願っていた。しかし、その後A君はもとのような求道的で熱心な会長になって、時々私の処へも顔を出した。

A君の顔を見ると、赤衣の女人が涙を流して憐んだ、落第したという教会長のことが自然に思い出された。何故涙を流して憐んだのだろうかと、その都度自問した。しかし、私は天理教の信者ではないからと、いつも自問をおさえた。いつであったか、或る日、落第した教会長はあの人ではなかろうかとふと思った。

昭和三十七年の十月、ソ連に招かれて、帰途フランスに三ヵ月滞在して帰国したばかりに、中山真柱氏から電話で、十五日に岳東大教会創立七十周年記念祭に出向くから、是非会いたいので私にも大教会へ来るようにとのことだった。「教祖様」を書き終ってから、大教会へ行ったことはないが、真柱氏がその九月に夫人を失なったばかりであることを知ったので、心重かったが赴いた。真

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com